

# 2025 年度日本医師会臨床検査精度管理報告会参加報告書

開催日時：2026 年 3 月 13 日

2025 年度日本医師会臨床検査精度管理報告会

報告者：琉球大学病院 川尻 洋行

## 1. 概要

2025 年度（第 59 回）日本医師会臨床検査精度管理調査の結果について報告を受けた。本年度は全国 3,148 施設が参加し、臨床化学一般検査、酵素検査、脂質検査、糖代謝検査、甲状腺マーカー、腫瘍マーカー、感染症マーカー、尿検査、血液検査および凝固検査の計 50 項目を対象に精度評価が実施された。近年の猛暑を踏まえ、配送に 2 日を要する地域ではクール宅急便による試料配送が導入されるなど、試料品質の確保に向けた対応が図られた。一方、測定法や試薬製造販売元の誤登録による評価対象外事例も引き続き認められ、正確な情報登録の重要性が改めて示された。

## 2. 各検査分野における考察および今後の取り組み

### (1) 生化学検査、免疫検査項目

生化学検査では、共通 CV 法を用いた評価により、測定法間および施設間における標準化が継続して推進されていることを確認した。一方で、測定法や試薬製造販売元の誤登録による評価対象外事例も認められており、正確な情報管理の重要性が改めて示された。免疫検査では、甲状腺マーカー、腫瘍マーカーおよび感染症マーカーで試薬別評価が行われており、測定系による差異を考慮した標準化の重要性を再認識した。特に TSH においてはハーモナイゼーション対応値を用いた評価が行われており、測定値の互換性向上に向けた取り組みが進められていた。

当県でも、新任技師が配属された施設や小規模施設において、例年 1 件程度の誤登録が発生している。今後は事例を収集し、該当施設を対象に、トレーサビリティの確保、検査装置・試薬・試料の取り扱い、外部精度管理の受講に関する研修会を開催したい。

補足：トレーサビリティとは、測定された検査数値が国際標準物質や基準測定法に結び付けられ、その関係を遡って確認できる仕組みである。

補足：ハーモナイゼーションとは、認証基準物質と基準測定法が存在しない TSH を標準化するための国際的な取り組みである。

### (2) 血液検査項目

血液検査では測定装置別に評価が実施され、装置性能の維持と日常管理の重要性が示された。血算データは診療の基本的な指標であるため、内部精度管理と機器保守を継続し、安

定した測定環境を維持することが重要である。血液検査精度管理試料に関するアンケートでは、2025 年度に溶血が全く認められないと判断した施設は、試料 20 で 62%、試料 21 で 85%であった。溶血度別の集計では検査値への影響はないと判断されているものの、試料配送には課題が残る。

当県では、血液検査項目用の精度管理試料にボランティア血を使用しているが、安全性の観点から、今後は人工試料への切り替えを強く推奨したい。

### (3) 凝固検査項目

凝固検査では、試薬と測定装置の組み合わせごとに評価が行われ、測定系の影響を考慮した品質保証の必要性が示された。凝固系検査は、救急医療や輸血医療において迅速性と正確性の両立が求められる分野である。また、試料の取り扱いに関して、ボルテックスミキサーの使用により凝固因子が活性化する可能性があるとの注意喚起があった。

### (4) 一般検査項目

一般検査では、尿試験紙メーカーごとの特性を踏まえた評価が行われており、測定原理や判定基準を理解する重要性を再認識した。また、内部精度管理を実施していない施設では D 評価率が高い傾向にあり、内部精度管理の実施を含め、検査状況を適切に管理することの重要性が示された。

## 3. 所感

日本医師会臨床検査精度管理調査は、臨床検査の標準化と品質保証を推進し、施設間で検査データの互換性を確保する上で重要な役割を担っていることを改めて認識した。今回は、試料の発送や取り扱いに関する言及が多く見られた。試料の選定や発送は、通常検査における検査前工程に相当する重要な過程であり、当県においても重要な課題であると考ええる。沖縄県医師会外部精度管理調査においては沖縄県内の収束状況を知る唯一の手段であるため物価高、資材の高騰の影響があるなかでも精度管理試料、発送手段の安定化および品質向上が求められる。今後も、精度管理調査の結果を日常業務の改善や職員教育に活用できるよう、継続的な品質改善、適切な評価報告体制の構築および啓蒙活動を推進し、臨床から信頼される検査データの提供に努めていきたい。

以上